

新 地場企業 群像

建物の意匠や構造、設備などの設計をはじめ、施工状況の監理を担う。強みを持つのは医療、福祉、教育の3分野で、これまで手がけた約3300の建築物のうち6割弱を占める。「人と建築の交わりを求めて」の理念の下、施設を使う人を想像しながら空間を創造することに重きを置く。

設立から80年弱。大旗祥社長は「この地域での事業展開にプライドを持つ。困った時に頼ってもらえる会社でありたい」と力を込める。培った実

大旗連合建築設計 (広島市中区) 使う人を想像して設計



3Dデータでの製図が主力ながら、模型も組み立ててイメージを膨らませる社員たち

績に加え、顧客と対話や検討を重ねる姿勢、相手の考え方に共感する設計が思いを裏付けている。

社員を財産と位置づける。社名に含まれる「連合」には、個性の連帯や一人一人の創造性を連ね合わせるという思いを込める。社員の力を磨くため、建築物の見学を推奨。ガラスと床の接し方や街並みとの調和など、面だけでは分からない造りから、個人の感覚を磨く。

近年の建設費の高騰から新規需要が減る中で、事業コンサルタントやまちづくりなどにも力を入れる。2022年には公共施設の建設や運営に民間資本を使うPPP・PF事業に参入し、山陽小野田市で他企業とともに再開発を手がけた。伊藤智宏取締役は「『とりあえずやってみる』という挑戦の意思が強い」と自社の特性を説明する。

大旗社長の祖父で設立者の正二さんは、原爆で焼け野原になった広島を復興したいとの強い思いを持って、平和記念公園(広島市中区)にある平和の時計塔(1967年設置)は正二さんが設計した。3代目に当たる大旗社長は「思いを引き継ぎ、地域のためにいい建物を造っていく」と誓う。(伊藤友一)

被爆経験企業 運営に参加

万博の広島県ブース

大阪・関西万博の会場で5日にオープンした広島県ブースは、80年前の被爆を経験した県ゆかりの企業が運営に参加している。平和への祈りを広げるため、仮想現実(VR)の技術を使って当時の惨禍を伝える。街の復興とともに歩んできたふりかけを配るコーナーもあり、来場者は広島

被爆直後の広島を追体験できるVRの映像は、広島発祥の準大手ゼネコン、フジタ(東京)が開発した。建設現場で使う技術を利用して、映像は旅行会社のたびまちゲート広島(広島市中区)がツアーで使用しており、両社はブースの運営に協力する。

フジタは、原爆の被害を受けた広島赤十字病院(当時)などの復旧に関わった歴史がある。会場を訪れた奥村洋治社長は「被爆の実相を知る語り部が年々少なくなる。広島企業とし

VRで惨禍再現 食の発信も



被爆の惨状に触れるVR体験のコーナー。万博限定のふりかけを配る田中食品のコーナー。来場者がレモンや広島菜など、思い思いの素材を選んで仕上げた



食文化のコーナーは、街の復興の上に発展を遂げてきた名物を紹介する。田中食品(広島市西区)はお好み焼き味をベースに、来場者が思い思いの素材を選んで仕上げる万博限定のふりかけを無料で配った。兵庫県芦屋市から訪れた飯塚知佳さん(41)は広島菜を選び「経験のない組み合わせ。食べるのが楽しみ」と笑顔を見せた。

田中食品は被爆で工場が全壊し、当時の社長が命を落とした。田中孝幸社長は「悲劇を乗り越えた上に明るい未来を築く。健康な食を世界に伝えていく」と語った。

ブースには県内の飲食店を紹介する映像コーナーもある。県は平和と食をアピールし、観光客の増加につなげる。

被爆電車のミニカー再販

広電、タカラトミーとコラボ



広島電鉄(広島市中区)は、被爆当時の路面電車の色を再現したミニカー「被爆電車653号トミカ」を4年ぶりに再販する。被爆80年に合わせて6日午後1時から、平和記念公園(中区)のレストハウスで千個を先行販売。18日から各営業センターで順次取り扱い、計6千個を売る。

車体の上半分は灰色、下半分は薄い紺色のデザイン。商品箱に広電のホームページにつながるQRコードを付け、原爆投下から3日後に己斐一西天満町間で広電が電車を走らせた歴史などを伝える。1個千円。

1942年製造の653号は2006年に営業運転から引退後、現在は袋井切り電車で走っている。各

◆新商品◆
ネスミ追い出すスプレー
アース製薬はネスミを追い出す「ネスミのみはり番1」を発売した。物置や納屋の隙間、壁の穴など、ネスミが潜んでいるような場所に噴射して使用する。天敵のネコのおいやすミが嫌うハッカの香

りなどを配合した。想定価格は1260円。無料の「お客様を頂く窓口」を8164556。

リンドウ出荷ピーク

リンドウの西日本最大の産地である新見市で、お盆を前に出荷がピークを迎えている。JA晴れの国岡山(選花場(同市)には連日約2万本前後が搬入され、岡山や広島、関西方面の市場に送られている。

品種は青紫の「しなの



早生」や白の「ベル」など7種で、同JAの職員20人が花の状態被害の有無などを確認し、箱詰めしている。同JA新見見センターは「夏場の一部で色づきに不良が生じたは花のポリユク、例年並みのしている。

夏場の涼しい夜の寒暖差が栽培されており、市内で0年から産地化している。今季は21・8秒で栽培を過去最多の15・1億円の売上額を指している。